第１学年　国語科の実践

１　単元名　　こえに出してよもう『はじめは「や！」』

２　単元目標　登場人物の言動から、様子を想像しながら読むことができる。

【関心】　登場人物の言動やその変化の様子に関心をもち、物語を読み進めようとする。
【読む】　登場人物の言動から、様子やその変化を想像しながら読み、それが伝わるように工夫して音読することができる。
　　登場人物が変化したところを考え、自分が思い浮かべたことを出し合うことができる。
【話　聞】　人物の言動から想像したり考えたりしたことを話し合うことができる。
【伝国】　文中の主語と述語の関係をとらえることができる。

３　「ひびき合う三の丸の子どもたち」をめざすための指導の工夫

研究課題・・・子どもが解決したい問題をもち、友だちとひびき合いながら学習する子どもの育成
手立て・・・・子どもの思いや願いを見とった単元構想と授業づくり
低学年ブロックテーマ　「感じる心、素直に表現する自分」
・人の言動に何かを感じる姿・自分の思いや、他者からの刺激を受け止め、素直に表現する姿

〈聴く・話すについての指導〉

まず、聴くことの大切さを指導した。入学してきた子供たちは、学校は勉強する所と漠然と思い描いていた子供たちに、「人の話を一生懸命聴くこと」が、一番の大切な勉強であることを話した。さらに、一人では考えられないことをクラスのみんなで考えを出し合えば、よい考えがたくさんでること、そしてそれが学習であることも指導した。日常生活の中でも話すこと、聴くことを意識させるようにしている。話したいことがあるときは、「はい、はい、」を連呼する児童もいるため、「はい。」と一度言い、手を挙げるように指導している。また、挙手するときには、「同じです。」「他にもあります。」「他の言い方をします。」「詳しくします。」など、友だちの意見につなげていけるように指導しているところである。ただ、まだ教師の発問に対して自分の考えをもつことができない児童もいるため、話し合いに参加できないことがある。まず、友だちの話をよく聴いて、誰の考えがよいか考え、真似するところから指導している。学習の中で「〇〇さんと同じで、～だと思います。」と自分の言葉にして言えるように指導している。

〈これまでの関わり合い・ひびき合い〉

話すことに抵抗がないように、朝の会で日直のスピーチを行い、話したことに対して、友達からの質問を受け、それに対して答えるというようなやり取りを取り入れている。そこで、質問が出ないように、わかりやすく話したり、詳しく話そうとしたりする児童の姿も見られてきている。また、隣同士で相談する。自分の考えを話してみる。日常の些細なことを隣同士で話す。というような、ペアトークを取り入れ、話すことが楽しいと思えるように指導をしている。そして、グループで話し合い、考えをまとめさせる。ように段階を踏みながら、ステップアップできるように指導中である。そのために、隣同士の席やグループメンバーにも配慮をしている。

学習中に、「でもさ・・・」「だって・・・」などと友達の意見につなげていこうとする姿も見られているが、個人差が大きく、話し合いに参加できにくい児童や、声が小さい児童もいるので個人差に応じての支援が必要であると考える。話し合いがわかる児童だけで進むことなく、全体を巻き込んで進められるようにしていきた

い。

4　単元と指導

〈単元について〉

本単元は、「くまさんになって、吹き出しに書く」という言語活動を行っていくことで、人物の言動に対する叙述をもとに、様子や心の動きなどを想像しながら読み取っていく言語活動を単元を貫いて設定している「活動型」の学習である。

「つかむ」段階では、場面ごとの視点に沿って人物の言動を部分描写し、自分の読みや思ったことなどを書き込ませることで、自分の読みを持たせていく。

「深める段階」では、視写・書き込みによってつくった自分の読みを出し合い、交流し合うことで、自分の読みを深め、みんなの読みをつくっていく。

「まとめる段階」では、交流し深化した読みをもとに、くまさんになって吹き出しを書き、交流し合うことで、読み取りを手紙という表現へとつなげていく。

ここで単元を貫くのは「二人は、いつ友達になったのか」などの、初発の感想や問題作りで出された子供たちの課題意識であり、それらを解決するために、「くまさんになって吹き出しを書く」という言語活動が位置づけられる。

低学年の物語文の学習では、登場人物に「同化」しながら読むことが大切となる。そのことで、物語の世界にじっくり浸り、読み味わう体験を十分にさせたい。

本教材は、時間的な経過に沿って物語が展開しているので、読み取りやすい。何度も出会う場面では、くり返しの地の文や会話文、心内語があるため、子供たちが想像しながら読んでいける。また、友達づくりについて子供たちの経験にも関わりが深いという点で、親しみのもてる作品でもある。「くまさん」が「きつねさん」と会うたびに抱く思いは、普段の生活の中で子供たちが友達に対して抱く思いと共通するところが多いからである。

また、叙述の整った分かりやすい文が多く用いられ、それぞれの場面にも挿し絵もあるので、本文と対応させながら二人の言動から様子や心の変容を、子供たちが登場人物に「同化」しながら楽しくとらえることができる教材である。

〈指導について〉

単元を貫く言語活動を「くまさんになって吹き出しに書く」こととした。吹き出しに登場人物の気持ちを書く学習は「たぬきのじてんしゃ」で行っている。この学習活動を通して自分の読みをもてるようにさせていきたい。自分の考えを持ちにくい児童や拾い読みをしていて内容を理解しにくい児童もいるため、場面ごとの人物の言動などを視写したり、書き込みをしたりしながら自分の考えをもてるように指導していきたい。また、一人一人の読みの交流によって深まったみんなの読みを生かしながら場面や人物の心の様子を想像し、くまさんになって吹き出しを書き、交流し合いさらに読みを深められるように指導していきたい。

本時では、初発の感想から「いつなかよくになったのだろう。」という課題を取り上げ、子どもたちから生まれるであろう「やといったときだよ。」「荷物をもってあげましょう。といったときだよ。」「一番の友だちになりました。ってかいてあるところだよ。」という様々な考えを引き出し、次時からの「もっと詳しく場面ごとにどんなことがあったのか」を読み取らせていくことにつなげていきたい。「いつともだちになったのか」を本文の叙述を根拠にあげ自分の考えを持ち、友だちの考えを聴いたり自分の考えを伝えたりする姿をひびき合いの姿としていきたい。自分の考えをより明確にするためにワークシートや挿し絵を用いて聴き手側が視覚的にも理解できるよう工夫していく。

5　単元構想

１学年　　国語科「はじめは『や！』」　全１０時間　　本時４時間目

単元目標	○登場人物の言動をもとに、想像を広げながら読むことができる。

事前の学習　「たぬきのじてんしゃ」「うみのみずはなぜしょっぱい」「おおきなかぶ」　⇒　登場人物の気持ちを考えたり、吹き出しに書いたりした。

★みんなで話し合うと楽しいな。
★もっと、お話を読んで、話し合いたいな。

初発の感想を書くことができる（関心）

『はじめは「や！」』って、どんなお話だろう①②

児童の感想から、全文を通した課題を作っていく。

題名読み　・「はじめは」だからなにか始まるのかな？
・「や！」といって何かをするみたい。　・内容が知りたいな。

全文通読（範読）　感想を書こう・感想交流をしよう　語句・登場人物の確認　言葉の確認　・主人公はくま　・きつね

みんなで、こんなことが話し合いたいな（学習問題）

二人が一番の友達になるまでにどんなことがあったんだろう。

二人はいつ仲良くなったんだろう。

なぜ、二人は一番の友達になれたんだろう。

きつねさんの荷物をくまさんがもってあげたところがよかった。

きつねさんは荷物を持ってもらってうれしそう

優しいくまさんだな。

初め、二人は仲良くなかったけれど仲良くなれてよかった。

問題解決のために、話の場面を確かめよう③

一人読みをして、くまさんの気持ちを想像することができる

登場人物・物語の背景の確認　・「野原」「町」「公園」と場面が変わっている。

一人読み　くまさんやきつねさんの気持ちがわかるところや、変わったところに線を引き、書き込みをする。

初
・スタタ　スタタ　スタタ　**でも**、ふたりはともだちじゃないから、「・・・。」
・だまってとおり過ぎました。

変
・「・・・。」でも、**まだ**ともだちじゃないから、すこしすまして、「や。」⇒・にもつをもってあげたくなりました。
・くまさんは、ベンチにおいたぼうしをとって、そっとひざにおきました。
など

学習問題をもとに、文からわかる気持ちを書き込んでいくよう助言する。

くまさんときつねさんの気持ちの変容に気づくことができる（読む）

二人はいつなかよくなったんだろう。④本時

言葉に着目することで、少しずつ変容していくことをとらえられるようにする。

・（きつねさんちょっと休んでいくといいのに。）それで、ぼうしをひざにおいたところだと思う。
・「・・・。」で、すまして、「や。」っていったところだと思う。

・でも、ふたりはまだともだちじゃないから、ってかいてあるから、違うと思う。
・「半分もちましょう。」っていったところだと思う。やって挨拶したから。
・「やあやあやあ。」って挨拶したところ。とたんにふたりはとってもとってもうれしくなって、その日から一番の友達になったって書いてあるから。

場面ごとの変容に気づくことができる（読む）

二人が一番の友達になるまでにどんなことがあったんだろう。⑤⑥⑦⑧

⑤⑥⑦⑧の学習を通し、くまさんの気持ちが変わったことに気づけるよう留意する

	野原で出会ったところで	町で出会ったところで	信号で出会ったところで	ベンチで出会ったところ
くまさんの気持ち	・スタタ　スタタ　スタタ。 ・きつねさんを見ました	・（あ、さっきのきつねさんだ。）	・横断歩道をあるきはじめました。	・（きつねさんちょっと休んでいくといいのに。）それで、ぼうしをひざにおいた。
きつねさんの気持ち	・スタタ　スタタ　スタタ。 ・くまさんを見ました	・（あ、さっきのくまさんだ。）	・横断歩道をあるきはじめました。	・ベンチにすわった。
	＊見ただけだから友達になっていない	＊気づいたけど友達になっていない	＊気づかずに通りすぎているから友達になっていない。	＊やっぱりこの場面で友達になったと思う。話をしている。荷物をもってあげている。 *友達じゃないと荷物を持ってもらわない。

でも、ふたりはともだちじゃないからだまってとおりすぎました。

でも、ふたりはともだちじゃないから**気がつきません**。それでふたりは、だまってとおりすぎました。

でも、**まだ**、ふたりはともだちじゃないから「・・・。」「や。」

「おおきなかぶ」や「たぬきのじてんしゃ」みたいに、お手がみをかきたいな。

きつねさんとともだちになったくまさんに手紙を書いて交流しよう⑨⑩

自分の経験や優しいくまさんの行動にも気づかせ、手紙を書くよう

6　本時について

（1）　本時目標

○二人はいつなかよくなったのか読み取ることができる。

（2）本時展開

学習活動	主な支援・留意点【評価】
1　本時のめあてを確認する。 二人はいつなかよくなったのだろう。 ○きつねさんがにもつをいっぱいもっているのをみたとき ・(きつねさんちょっとやすんでいくといいのに) ・くまさんは、ベンチにおいたぼうしをとってそっとひざにおきました。 ○すこしすまして、「や。」といったとき ・声をかけているから ・絵を見るとお互いに見ているから ○にもつをもってあげたとき ・荷物を持ってあげたくなりました。 ・「はんぶんもちましょう。」友だちじゃなければ持たない。 ・きつねさんも「や、ありがとう。どうもどうも。」といっているから。 ○次の日に会ったとき ・「やあやあやあ。」とお互いにあいさつしているから。 ・ふたりはとってもうれしくなってとかいてあるから ・なかよし、いちばんのともだちになりました。とかいてあるから。 今日の学習の感想を書こう。	○本時のめあてを確認し、学習意欲がもてるようにする。 ○本文を読み内容を確認する。 ○自分の考えを書いたワークシートや教科書を読み返し確認する。 ○挙手するときに、同じ、似ている、他にあるなどが言えるように声をかける。 ○必要に応じて動作化を取り入れ、根拠がさらに明確になるようにする。 ◆読み取った自分の考えを発表したり、友だちの考えを聞いたりしている。【関心・意欲・態度】

7　実践を終えて

（1）　単元構想について

「１年生は学習の仕方を学ぶ」と、いうことも大切なことである。そのため、今回初発の感想を書かせると

きに、「どうしてかな」「なぜだろう」という項目を設けた。ただ、「くまさんは優しい」「仲良くなれてよかった」という感想で終わるのではなく、物語文を深く読ませるために、また、自分の問題として読み進めさせていくために、初発の感想を大切にしたいと考えた。物語文の学習の仕方を様々な方法で学習する経験を積み重ねることで、学習の基礎が身についていくと考えるからだ。そして、この基礎をもとに上の学年に進むにつれて、「こんなふうに学習を進めたい」という学習の見通しをもてるようになってくると思う。そして自分の課題が取り上げられることで、学習への意欲が高まることにつながる。さらに、場面ごとに読み取って行く前に、全文を読んで「いつ、二人は仲良くなったのだろう。」という子どもから出た、課題を投げかけることにした。この問題は、子どもたちにとって解決したい切実な問題となり、本文を一生懸命読み、仲良くなったと思われる文章を探すことになるだろう。そして、それこそが、物語文を深く読むという学習につながっていくと考えた。「たぬきのじてんしゃ」や「うみのみずはなぜしょっぱい」では、場面ごとに学習を進めたが、今回は大まかに全文をとらえさせてから、場面ごとに詳しく読み取っていくという方法で学習を進めることにした。これにより場面を読み取るときに、解決したい課題の答えはどこに書いてあるか、より真剣に読み進めることができると考えた。この流れは、児童の実態に合っていたと考える。

（２） 本時について

本時は、「いつ、二人は仲良くなったのだろう。」という問題について、４場面の荷物をたくさん持っているきつねさんのためにベンチにおいた自分の帽子をそっと膝に置くくまさんの行動や、はじめて自分から「や！」と声をかけたくまさんの行動を仲良くなったととらえる子と、荷物を持ちましょうと持ってあげた優しい行動をなかよくなったととらえる子、そして、５場面のそれから二人は友だちと書かれているところからと考える子というように様々な考えがでた。そして、自分の考えを相手に伝えようとすることでさらに考え、相手の意見をよく聞くことでまた、自分の考えを深めたり、訂正したりすることができた。友だちという言葉ではなく、仲良くなったとあえてしたのは、友だちという言葉の表す意味が広いためである。「声をかけただけでは友だちではない。」と、とらえたり、「知らない人には声をかけない。」と、とらえたり、子どもたちは様々な観点から考えることができた。

（３）本時後について

本時後は、場面ごとに丁寧な読み取りを行った。叙述に即して言葉を拾い確認したり、動作化をしたりしながらくまさんの心の動きを心情曲線に表した。心の動きを読み取ることで、まだ、「なかよくなっていない。横断歩道ですれ違っても気づいていないから。」とか、「くまさんの顔が笑っているからもう仲良くなっている。」など、挿し絵にも注目しながら読み進めていくことができた。

（４）成果と課題

自分の思ったことや考えたことを文に書くことは１年生のこの段階では個人差がある。思っていることはあっても文字として、または文にすることが苦手な子には、個別に話しながら聞き取り文として表現できるように支援した。また、自分の考えをもてない子については、友だちの真似をするところから始めた。そして、子どもたちから出た「二人はいつなかよくなったんだろう」を、単元を貫く課題として設定した。物語を読むときに、どの場面にこの課題解決のための重要な手がかりが隠されているかを、子どもたちは進んで読み取ることができた。また、「友だちってなんだろう」あいさつしたら友だちなのか、いつも遊んでいるから友だちなのかなど、様々な意見が出た。今回全文を読んで先に課題について話し合いをさせたことは、その次の場面ごとの深い読み取りをする際の意欲につながりよかったと思う。

ただ反面、話し合いが活発になってくると自分の考えを伝えられない子については、自分の考えをワークシートに書いていった。話し合いの土俵にどう上げるか、その手立てをさらに工夫する必要があると感じた。